

八鹿小学校長東井義雄が求めた学ぶ教師の姿 ～千葉教諭の『週録』(1970年4月～1971年3月)にみられる 東井との対話を手がかりにして～

How did Yoshio TOHI of YOUKA elementary school principal lead teachers' learning ?
～ The dialogue with TOHI in the weekly record of education (written in 1970) by
teacher CHIBA as a clue ～

原 田 三 郎
Saburo HARADA

要旨：

東井義雄の『培其根』は、八鹿小学校長である東井が、教師たちが毎週書く『週録』の「反省記録」の中から他の教師たちにも読んでもらいたいものを抜き出し、それにコメントを付けて便りとして発行したものである。東井は、そのもとになる『週録』の「反省記録」にも、一人一人の教師に丹念にコメントを書いていた。

東井の下で、6年間八鹿小学校で勤務した千葉孝子の6年生を担当したときの『週録』が見つかった。そこには、毎週提出される千葉¹⁾の『週録』の「反省記録」に対して、東井のコメントがぎっしりと綴られていた。千葉が「反省記録」に綴る日々の出来事や悩み、喜びなどに対し、東井はその倍以上の文字数で返事を書き、それが、1年に渡って繰り返されている。そこに記述されているやり取りは、千葉、そして、東井自身の学びの履歴でもある。そして、そこに記述されている出来事からは、登場する八鹿小学校の教師たちが東井校長の下、ともに学び合いながら八鹿小学校の教育を推進していった様子をとらえることができる。

本論では、千葉の『週録』を手がかりに、校長としての東井がそこに何を綴り、どのような学ぶ教師の姿を求めたのか、そして、それによって、どのような教師たちの姿が具現されていたのかについての考察を試みた。そこからみてきたのは、東井が『週録』を通して、教師同士をつなげ、直接的な対話を促し、授業や日々の教育活動について検討し合うことのできる教師集団を形成しようとしていたことである。そして、そこに創出されていたのは、対話を通して構築された現場の教育学である。果たして、現在、日常的に教師同士がどれだけ、対話を通して、目の前にいる子どもの姿に応じて、授業や日々の教育活動を省察し、自分たちの言葉で日々の授業や教育活動を構築することができているのか。東井と千葉との『週録』上でのやり取りは、こうした現場の教師間における対話の問題を現在の私たちに問いかけている。

キーワード：東井義雄 培其根 対話 週録 教師の学び

1 問題の所在と研究の目的

日本は伝統的に教師同士が学び合う文化を形成してきた。授業を参観し意見を交わし、よりよい授業を模索する授業研究は、「レッスンスターディ」と呼ばれ、1990年後半、アメリカに紹介され、2000年以降、国際的な広がりを見せてきた。現在も、日本各地の多くの小中学校では、授業研究などを通して教師同士が学び合うといったいとなみは脈々と受け継がれ行われている。

しかし、その内実は、かなり変化を見せている。石井は、次のように指摘する。

PDCA サイクルの現場への浸透という文脈において、教師の実践研究としての授業研究も、授業改善・学校改善を効率的に達成する手法として、その中に組み込まれ形骸化していくことが危惧される。指導案の検討は、各自治体などが開発した標準的な指導案に沿って項目を埋めることに、他方、授業後の検討会は、PDCA サイクルに沿って授業の振り返りと改善計画の立案という形をなぞることに矮小化されてはいないだろうか。²⁾

効率化やとらえやすい成果を求めようとすることによって、定型化された授業展開や目標に応じた観点が明確に示された評価シート等が活用されることも多くある。そうした基準に照らして、授業の善し悪しが判断され、課題については改善が求められる。そこで多く交わされるのは、一般化、標準化された日本全国どこでも活用可能な教育用語である。加えて、学習指導要領を始め教科書の指導書等もかなり具体的な指導内容が記載されるようになり、それに従って行えばよしとする風潮もある。目の前にいる子どもの姿や教室の事実をとらえ、現場の教師のもつ言葉で授業や子どもたちの日常について語り合う、そうした場面が、多くの情報を様々な方法で手に入れやすくなった現在、失われてきている現状がある。ネット上には指導案や標準化された指導方法や板書等が溢れ、経験の浅い教師たちは、まずは、ネットで調べてみることから授業づくりに取り組むことも多い。教師たちが今向き合っているのは（そうせざるを得ないのは）、パソコンの画面であり詳細に授業展開や板書例が記述されたマニュアルとしての指導書であり、必要項目を記入するためのワークシートや授業を評価するチェックシートである。こうした事態に対し、石井は、「教師自身が、自分たちの授業の構想・実施・省察のプロセスを語る自前の言葉と論理（現場の教育学）を生成・共有していくのを促進することが求められる」³⁾とする。

それでは、教師自身が現場の教育学を生成・共有していくとなみとはどのようなものだろうか。石井は、「1990年代以降の授業研究の展開の中で見落とされてきたものの再評価」の必要性を論じ、次のように示す。「教師の実践研究の質という点に関わって、日本の教師たちは実践記録を綴るのみならず、そこに埋め込まれた『実践の中の理論』を自分たちの手で抽象化・一般化し、それを比喻やエピソードも交えながら、明示的かつ系統立てて語ってきたという事実注目する必要がある。またそこでは、単なる技術や手法だけではなく、教育の目的、授業の本質、教科の本質、子ども観など、実践経験に裏付けられた豊かな哲学や思想も語られていた」⁴⁾という。そして、「1960年代以降に活発化した大学の研究者による授業研究や教授学創出の試みは、教師たち自身による『実践の理論化』の蓄積の上に成り立っていたと言っても過言ではないだろう」⁵⁾とする。若手教師が増えている現場にとって、「明日から使える教育技術」も時には必要であろう。フォーマットや定型化した手順を示しそれに照らすことで、効率的な実践ができるのかもしれない。しかし、現場の教師たちが自分の経験や教育観に立って語り合う言葉には、教育の本質を探究していくことのできる大きな力が秘められているのではない。先達たちがそうしてきたように、現場の教師たちが教育について語り合い、学び合う、そうし

たいとなみそのものに、その意義や意味を見出していく必要があるのではないか。

本論では、東井が1964年（昭和39年）より校長をしていた八鹿小学校⁶⁾において、教師たちがともに高め合う姿を具現していくために、東井がどのような願いをもち教師たちに働きかけていったのかを、上田の示す対話の概念⁷⁾を手がかりとして、千葉教諭⁸⁾の『週録』⁹⁾に記録されている出来事やそれに対する千葉の思いや省察、また、それを讀んだ東井が千葉に送った言葉等からとらえていく。教育が現代化へと向かい、落ちこぼれ問題が広がっていく直前の時代、まだコンピュータなどが普及しておらず、手書きで指導案を書き、実践を綴り、鉄筆で印刷原稿を作成していた時代である。八鹿小学校の教師たちが『週録』に綴った反省記録とそれに寄せた東井の言葉、そのやり取りを東井が抜き出し、まとめて校長便りとして配付したものが『培其根』¹⁰⁾である（千葉が八鹿小学校に在任し東井が退職するまでの6年間に渡って発行された。発行されたすべての便りが全6巻にまとめられ『培其根』として刊行されている）が、本論で一教師の『週録』を取り上げるのは、『週録』には、教師たちの日常が綴られており、飾りのないそのままの日常が東井とのやり取りを通して積み重ねられているからである。綴られている出来事は、日常という文脈に位置づけられているのであり、予定的、計画的なものではない。つまり、綴る側に、当事者以外（この場合は、千葉と東井）にそのやり取りを他者に伝えようとする意図は、基本的にそこにはない。そうした日常のありのままの姿が綴られているという意味で『週録』は大変貴重な資料と言えるが、管見の限り、東井が校長を務めた八鹿小学校の時代の『週録』で、残されているものは、千葉の2年間に渡るもののみである。

『週録』を讀み解くのにあたり、対話をキーワードとしたのは、『週録』に綴られている千葉と東井が文字を通して交わした様々な事柄は、東井と千葉との対話ととらえることができ、その対話を通して、千葉も東井も、そして、彼らを取り巻く八鹿小学校の教師たちも、教育というとなみの本質へと迫っていったのではないかと考えたからである。そこには、飾ることのない赤裸々な教育現場の姿があり、子どもの事実や教室の事実と向き合い、「教育の目的、授業の本質、教科の本質、子ども観」の探究に取り組んだ教師たちの奮闘の姿がある。こうした、学び合う教師たちの姿をそこに具現したのが、八鹿小学校長としての東井である。

それでは、『週録』に綴る言葉によって、東井はどのような教師の姿をそこに求めたのだろうか。そこに、学び合う教師たちのどのような姿が具現されたのであろう。そして、そこからは、教師が学ぶということについて、どのような示唆を得ることができるであろう。

本論では、東井の願い、そして、求める教師の姿を、以下の2つの視点からとらえる。

- 1 東井と千葉教諭の対話〈千葉教諭の『週録』を手掛かりに〉
- 2 千葉教諭と八鹿小学校の教師たちとの対話〈千葉教諭の『週録』及び、千葉教諭へのインタビュー¹¹⁾を手掛かりに〉

東井が校長をしていた時代の八鹿小学校の『週録』へ着目した先行研究には、畑井の「校長としての東井義雄：若手教師の育て方、千葉孝子の実践を通じて」¹²⁾がある。これは、昭和46年度の5年担任の千葉教諭の『週録』を題材にしたものである。畑井は、千葉の『週録』の中の一つの事例を取り上げる中で、『培其根』は、校長の経営方針を全職員が共有できる学校通信メディアとしての機能を果たし、それによって若手教員が成長していったのだと結論付ける。

確かに、『培其根』に掲載される様々な教師のエピソードや授業記録、そして、それに対する東井のコメント、また、『週録』における東井とのやりとりから、教師たちは多くの示唆を得ることができ、自分の実践を高めていく手がかりをそこから得ることができたであろう。しかし、『週録』をつぶさに見ていくと、『週録』を通して東井が一人一人の教師に働きかけていたことの果たした意義のもう一つの側面を捉えることができる。それは、教師同士をつなげ、教師同士の対話をそこに生み出そうとしていたことである。畑井の考察には、その指摘はない。本論で取り上げるのは、その前年、1970年4月から1971年3月まで（昭和45年度）の6年担任の千葉教諭の『週録』で、畑井が研究対象としたものの前年のものである。これは、最近（2018年）見つかったもの¹³⁾であるが、そこには、『培其根』には掲載されていない多くのエピソードが記載されていた。後述するが、千葉は、この年度に初めて高学年を担任する。若手教師の6年担任への抜擢、千葉が経験のない高学年を担任することに対して、校長や周りの教師たちがどのように関わっていったのかという観点からも、この一年間の『週録』を取り上げる意味は大きい。本論では、そのエピソードを「対話」をキーワードとして捉え、東井が求めた学ぶ教師の姿について考察する。

2 東井と千葉の学び合い

(1) 千葉教諭について

千葉は、教師生活5年目で、東井校長のいる八鹿小学校へ自ら望んで赴任し、昭和41年（1966年）3年生の担任となった（新任から4年間は、兵庫県大屋町立明延小学校で勤務。2年生を2回、3年生を2回担任）。その後6年間東井校長の下で働き、東井退職後1年間八鹿小学校に勤務した後、家庭の事情で退職する。東井校長の下では、最初に3年生担任、次に特別支援学級¹⁴⁾担任を3年間、そして、6年生担任、5年生担任を務める。本論で扱う『週録』は、千葉が八鹿小学校5年目、教師生活9年目で、初めて6年生を担任したときのものである。

八鹿小学校の教師たちが毎週書いているこの『週録』の「反省記録」の欄には、毎週、校長である東井がコメント（以下、『週録』に書かれた東井の言葉を“コメント”と書き表す。『週録』には、校長が言葉を書く欄は設定されておらず、東井の言葉は、すべて余白や裏面に記されている）を寄せている。千葉の反省記録とそれに対する東井のコメントは、『培其根』に6年間で14回掲載されており（資料1）、6年生を担任した一年間は、1回の掲載（『培其根』第36号〈昭和45年4月発行〉）である。第36号に掲載されている千葉の反省に対する東井のコメントは、『週録』に実際に記載されているものとは異なっており、このことから、東井が『培其根』の掲載にあたって、直接『週録』に綴ったものとは、文面を変えたコメントを『培其根』に添えていたこともわかる。

さて、若手教師であった千葉はどのような教師だったのだろうか。千葉の経歴、人柄・教育観等については、畑井（2014；前掲）に詳しいが、東井は、特別支援学級担任中の千葉について、次のようなエピソードを綴っている。

国会議員の選挙の日であった。リヤカーや担架で運んで投票させる肢体不自由の有権者

『培其根』の発行年月と、その中で、千葉の週録が掲載されているもの

資料 1

発行年月	1966.4～1967.3	1967.4～1968.3	1968.4～1969.3	1969.4～1970.3	1970.4～1971.3	1971.4～1972.3
『培其根』 巻名	1巻	2巻	3巻	4巻	5巻	6巻 東井退職
千葉 担当学年	3年担任	特別支援	特別支援	特別支援	6年担任(ひろば)	5年担任(スクラム)
培其根の号数と発行年月日 千葉の週録が掲載されている培其根については、そのタイトルを掲載している。	1号 昭和41年6月	8号 昭和42年4月	19号 昭和43年4月	28号 昭和44年5月	36号 昭和45年4月	46号 昭和46年4月
	授業の記録	特殊学級第二週	ある朝のこと	杉の下刈り	学級通信「ひろば」 第一号から	できないことがあるから できるように なるよこびがある
	2号 昭和41年9月	9号 昭和42年5月	20号 昭和43年5月	29号 昭和44年6月	37号 昭和45年5月	
	「小さな声で話をしよう」	10号 昭和42年6月	21号 昭和43年6月	30号 昭和44年9月	38号 昭和45年6月	47号 昭和46年5.6月
	3号 昭和41年10月	ある友への手紙 —特殊学級の子どものこと	22号 昭和43年6月	体育会のあとで	39号 昭和45年7月	二十分間より うちのあった 十分間 すばらしい 十分間 高瀬雅樹
	4号 昭和41年10月	11号 昭和42年7月	23号 昭和43年7月	31号 昭和44年10月	40号 昭和45年9月	
	5号 昭和42年1月	12号 昭和42年9月	24号 昭和43年9月	32号 昭和44年11月	41号 昭和45年10月	48号 昭和46年7月
	主婦としての自己を	虹から夕焼けまで	25号 昭和43年9月	33号 昭和44年12月	42号 昭和45年12月	49号 昭和46年9月
	6号 昭和42年2月	13号 昭和42年10月	26号 昭和43年10月	34号 昭和45年1月	43号 昭和46年1月	50号 昭和46年11月
	7号 昭和42年4月	14号 昭和42年11月	27号 昭和44年1月	35号 昭和45年2月	44号 昭和46年2月	51号 昭和47年1月
	卒業式	15号 昭和42年12月			45号 昭和46年3月	
		「遠足の記録」から				
		16号 昭和43年1月				
		17号 昭和43年2月				
	18号 昭和43年3月					

や病気の有権者にとって一番便利のいい特殊学級の教室を投票所に貸してほしいという申し入れを選挙管理委員会から私は受けた。

文部省からも「授業日ではあるが、できるだけの便宜を与えるように」という通達が教育委員会にも来ているということであった。その日一日人数の少ないその学級の子らには、別の教室で学習してもらうように、一応は担任にも声をかけて、私は申し入れを了解してしまったのである。

千葉さんは選挙管理委員会の考え方が、恵まれぬ子らを軽視していると腹を立てたのであるが、責められるべきなのは私であった。—中略— その、どこまでも食いさがつて攻めていく千葉さんにやりこめられながら、私はうれしかった。恵まれぬ子らのためには、このような必死さで彼らを守る教師が必要なのだと思います。前にも述べたように、千葉さんには経験がない。しかし、経験のなし得ない仕事を、すでに幾つも幾つもやっている。私は、しみじみ、経験よりも意欲だと思ふ。そういう意欲をかりたててやまない子らへのほんものの愛が結局は仕事をしていくのだと思う。¹⁵⁾

「経験よりも意欲」「意欲をかりたててやまない子らへのほんものの愛」。東井がそうしたものを千葉の日々の教育のいとなみに見ていたように、千葉は、「子どもたちのため」とおれない軸をもって、労を惜みず主体的に教育活動に取り組むことのできる教師であった。

千葉は、特別支援学級の担任を3年間勤めた後、昭和45年度、6年(3学級)2組の担任(児

童数 33 名) となる。千葉にとっては、初めての高学年の担任である。「経験よりも意欲」を大切に、千葉を経験のない最高学年である 6 年生の担任とした東井の気持ちが伺われる。こうした立場にある若手教師を、東井はどのように育てようとしたのだろうか。千葉の『週録』に綴られた数多くの東井の言葉から、東井の願いをそこに読み取ることができる。

6 年生になって初めての『週録』第 1 週目の裏面に、東井の次のような言葉が綴られている。

「〇〇ちゃんが『一年生の子のはやさにあわせて歩こうと思う』と書いた」それだけのことを、こんなに感動し、よろこびとできる。—中略— そのことが、〇〇ちゃんにとっては、今、何より必要なことで、そこに、千葉さんを、六年生の担任になっていただいたことの意味があり、ねがいがあるのです。¹⁶⁾

昭和 45 年度 4 月、始業式を終えた次の日、4 月 7 日に発行された千葉の学級通信『ひろば』¹⁷⁾には、「六年生になって」と題して、数名の児童の短作文が掲載されている。それらには、担任である千葉の言葉が添えられているが、〇〇ちゃん¹⁸⁾ という児童の短作文に対し、「〇〇ちゃんはやさしいだね。一年生の気持ちになって考えるから こんな思いやりのこもった工夫がうまれてくるんだと思います。大変な仕事だけどしっかり頼みますよ」という言葉が添えられ、そのまま通信に掲載されている。本人が書いたものだけではなく、それを讀んだ担任の言葉も掲載されているのは、『培其根』を通じて東井が教師たちに行ったことと同様のスタイルである。上記の東井の言葉は、早速、学級通信『ひろば』を讀んだ東井が『週録』の裏面に寄せたコメントである。東井の「〇〇ちゃんにとっては、今、何より必要なこと」という言葉からは、単に、「一年生の子のはやさにあわせて歩くと考えることのよさ」だけではなく、6 年生スタート時に〇〇ちゃんがそうしようと考えたことの意味、その大切さをとらえた千葉の〇〇ちゃんを見取る確かな眼差し、そして、それを学級通信でクラスの仲間や保護者たちに発信していくことの意義、そうした一連の行為ができる教師としての千葉の力量をとらえ、それらを千葉自身に返し自覚化させていこうとする東井のねがいを読み取ることができる。当然のことながら、「〇〇ちゃんにとって大切なこと」と記すことのできる東井自身も、〇〇ちゃんについての見取りができていからこそ、こうしたコメントを寄せることができるのである。

第 1 号「ひろば」に紹介された 4 名のうち 3 名の小作文が、千葉のコメントとともに『培其根』36 号に掲載されている。『週録』からのものではなく、学級通信「ひろば」の内容の紹介である。以下、『培其根』に綴られた東井の言葉である。

子どもという いのちの袋の中には いろんな 宝物がはいっている
 にも かかわらず その宝物のすばらしさを 知らずにいる
 そして そのすばらしさを見出してくれるものがないと
 子ども自身でさえ つまらない自分だと思いこんでしまう
 いったん そう思いこんでしまうと 深い 深い 眠りに おちたのといっしょ。
 なかなか 覚める ということが できない。
 教師の たいせつなしごとの一つは 袋の中の宝物のねうちをしらせるしごと。

「自覚」に 火を点じるしごと
千葉さんは「ひろば」で それを やってくださる。

千葉の行っていることの意味を千葉自身に自覚させるとともに、『培其根』で紹介し、他の教師たちにも知らせる。『培其根』は東井のめざす教育を具現するための重要な役割を果たした。しかし、『培其根』が成立するための前段階となる『週録』における一人一人の教師との日常的なやりとりなくして『培其根』は成立しない。東井は、『週録』を通して、一人一人の教師と地道な対話を繰り返してきた。

教師9年目の6年担任の千葉と八鹿小学校長である東井の『週録』上での対話をさらに詳しくみていく。まず、1年間に渡る『週録』上での対話の全体像をとらえ、その後、教師を育てるという観点から、具体的なやりとりの内容について考察を加えていくことにする。

(2) 「昭和45年度『週録』 八鹿小学校6年2組 千葉孝子」の概要

① 内容

昭和45年度の『週録』には、41週（1学期15週、2学期16週、3学期10週）に渡る授業の記録と、千葉の反省記録、その反省記録に対する東井のコメントが記されている。41週のうち東井のコメントがないものは3回。それ以外は、その週の頁の裏面（裏面は何も印刷されていない空白の頁である）のほとんどが東井の言葉で埋められている。

次頁資料2はその概要であるが、東井と千葉とのやり取りで、授業についての内容が含まれるものが16回（42%）、千葉の発行している学級通信『ひろば』について書かれたものが5回（13%）、授業外（行事や日常生活、保護者や地域活動等）についての内容は30回（79%）、八鹿小学校の同僚の名前が登場するものは14回（37%）、児童の具体的な名前が記された記述は8回（21%）、千葉の教育活動を認めるコメントが27回（71%）、千葉の反省に関連付けて東井自身の経験や書籍の内容を紹介してあるものが16回（42%）である。

このようにみても、『週録』で扱われているのは、授業以外の日常的な教育活動についての話題が大変多いこと、様々な行事や日常の活動についての千葉の雑感に対して、東井がその多くに承認のコメントを送っていることがわかる。これらのことから、八鹿小学校の教育が授業に特化したものでなく、学校生活や地域との関わりの中で進められていたこと、そして、そうした教師たちの日々の営みの中にその教師のよさをとらえようとする東井の一人一人の教師に対する確かであたたかなまなざしをみることができる。それが、コメントという形で本人にフィードバックされていたのである。一人一人の教師が東井の言葉によってどれだけ勇気づけられていたのか、想像に難くない。

ここで、注目したいのは、東井と千葉のやり取りの中に、八鹿小学校の同僚の名前が登場するものが多くあることである（全体の37%）。私的な経験になってしまうが、私自身、小学校現場で教師の週案（ここでいうところの『週録』と同様なもの）に書かれた1週間の反省に対してコメントを書くという仕事を何年も行ってきた。しかし、他の教師の名前をこのコメントに挙げたことはほとんどない。また、自分の綴った反省に対して送られたコメントに他の教師

千葉と東井が『週録』を通して語り合った主な内容

資料 2

(右は、内容を分類し、話題に上がった内容について○印をつけたもの)

- 「授」…授業についての話題 「ひ」…学級通信『ひろば』についての話題
- 「生」…子どもたちの生活についての話題
- 「同」…同僚（他の教師）についての話題
- 「例」…東井自身の具体的な経験や書籍からの引用などに触れて返事を書いているもの
- 「承」…千葉の教育活動や考え方に対する承認のメッセージを綴っているもの

週	自	至	千葉の反省記録 (主な内容)	東井の言葉 (主な内容)	授 生 同 承 例
1 学期	1	4月6日～4月11日	教材研究の必要性	学級通信「ひろば」	○ ○ ○ ○
	2	4月13日～4月18日	授業づくり・朝掃除	貴女が存在を生かしてほしい・そうじ	○ ○ ○ ○
	3	4月20日～4月25日	一部の男子の振る舞い	「ひろば」のこと・子どもをそうさせていたもの	○ ○ ○
	4	4月27日～5月2日	家庭訪問	A(千葉が担任をしていた子)から校長への手紙	○ ○
	5	5月4日～5月9日	A児、B児、C児	「学ぶこと」の意義・まんが	○ ○ ○
	6	5月11日～5月16日	授業	同僚たちの動きについて・「ひろば」	○ ○ ○ ○
	7	5月18日～5月23日	小体育会、授業	教師の願い、子どもの立場について	○ ○ ○ ○ ○
	8	5月25日～5月30日	国語の授業、小体育会	伸びるよろこび・下なんばのコーラス	○ ○ ○ ○ ○ ○
	9	6月1日～6月6日	自転車検定・平野学級の授業	自転車のこと	○ ○
	10	6月8日～6月13日	出張期間の先生たちの助け	お互いがお互いの力になる	○ ○ ○ ○
	11	6月15日～6月20日	ごみをなくす子どもたちの相談・D児	城陽小の子どもたち・人間と人間のふれあい	○ ○ ○ ○
	12	6月22日～6月27日	父母集会(誕生会)・国語の授業	いのちのこと・子どもたちの記録	○ ○ ○ ○ ○
	13	6月29日～7月4日	長期出張による1組の解体	過疎、過密の問題	○ ○ ○
	14	7月6日～7月11日	国語の授業(童話づくり)	童話づくりのこと	○ ○ ○ ○
	15	7月13日～7月18日	県警移動音楽隊・童話づくり	出張中の配慮・水泳大会の企画構想	○ ○ ○ ○
2 学期	1	9月1日～9月5日	夏休み・始業式・学年団	6年生の在り方・千葉先生の生き方	○ ○ ○ ○
	2	9月7日～9月12日	プール(児童のがんばり)	児童Eのがんばり	○ ○ ○ ○
	3	9月14日～9月19日	体育会に寄せる決意	児童への千葉先生の影響、指導感化	○ ○ ○ ○
	4	9月21日～9月26日	体育会がすんだ	感動的な体育会	○ ○ ○ ○
	5	9月28日～10月3日	校内での暮らしがガタガタしている	子どもを見るときということ	○ ○ ○ ○
	6	10月5日～10月10日	ろうかを走らないことへの取組	ろうかを走らないことへの取組み事例紹介	○ ○ ○ ○
	7	10月12日～10月17日	見えないものに対するありがたさ	傷のこと・饞別問答への感謝	○ ○ ○ ○
	8	10月18日～10月24日	饞別のこと	やれなかったんじゃなく、やらなかった	○ ○ ○ ○
	9	10月26日～10月31日	六年生の目玉がくもっている	下なんばのコーラス	○ ○ ○ ○
	10	11月2日～11月7日	黙って掃除スタート	「そうじ」に人間があらわれる。ハンタカの話	○ ○ ○ ○
	11	11月9日～11月14日	授業がうまくいかない	千葉さんの頼もしさ・自身の経験(授業試合)	○ ○ ○ ○ ○
	12	11月16日～11月21日	授業の弱さの自覚・国語の授業	授業実践の紹介(卒業生)	○ ○ ○ ○
	13	11月23日～11月28日	女子のごたごた	愛と憎	○ ○ ○ ○
	14	11月30日～12月5日	授業(社会)	子どもたちの目ざめを大切にしたい	○ ○ ○ ○ ○
	15	12月7日～12月12日	女子のごたごた・ピアノのレッスン	千葉さんの音・子どもへの期待	○ ○ ○ ○
	16	12月14日～12月19日	心と身体バランス・授業の脱線	無用の用・体に年輪がない子ども	○ ○ ○ ○
3 学期	1	1月8日～1月9日	教師とのふれあい	教え子 みなわが師なり	○ ○ ○ ○
	2	1月11日～1月16日	卒業・算数の学習形態(学年会)	生涯の思い出になる三学期に	○ ○ ○ ○
	3	1月18日～1月23日	卒業までの話し合い(児童)	三学期の生き方	○ ○ ○ ○
	4	1月25日～1月30日	ローマ字の指導・だまってそうじ		○ ○ ○ ○
	5	2月1日～2月6日	卒業式のもち方(学年会)	卒業を自分の将来にどう位置付けるか	○ ○ ○ ○ ○
	6	2月8日～2月13日	弱いものいじめ・子どもへの謝罪	藤原先生の実践紹介・「批判」の怖さ	○ ○ ○ ○
	7	2月15日～2月21日	御影小の歌声の美しさ	御影小の教育のあり方が、歌声をつくっている	○ ○ ○ ○
	8	2月22日～2月27日	松岡学級の歌声(課題)		○ ○ ○ ○
	9	3月1日～3月6日	ラストスパート	6年生の動きのすばらしさ	○ ○ ○ ○
	10	3月8日～3月13日	朝の見回り・床磨き(子どもの活動)		○ ○ ○ ○

回数 16 5 30 14 27 16
% 42 13 79 37 71 42

の名前が登場することもまずなかった。こうした経験からすれば、東井と千葉とのやりとりの約3分の1に同僚の名前が登場するのは、かなり特徴的なことであるととらえることができ、八鹿小学校の同僚のつながりの強さをそこに見ることができる。

学期別にみると、授業についての記述が多いのは、1学期と2学期後半である。これは、1年間の学校生活の流れを見たときに、現在の学校現場もそうなのであるが、授業に打ち込みやすい時期と重なる。2学期前半に、授業ではなく学校生活についての記述が多くなるのは、体育会（現在の運動会）とそれにかかわる児童の学校生活についての言葉が多く交わされたからである。3学期は、ほぼ学校生活についての記録であるが、これは、卒業式に向けた取り組みと6年生のまとめとしての生活についてのものが多いからである。

② 「反省記録」に対する東井の考え方

『週録』の反省欄（「反省記録」というタイトルが付けられている）は、B5版の用紙の3分の1程度、ばらつきはあるが、千葉は大体平均して、200文字程の反省を毎回書いていた。それに対し、東井は、B5版の裏面全体、400文字～500文字程度、あるいはそれ以上のコメントを書いている（裏面だけでは足りず、表面の空いているところまで使って言葉を書いてある週もある）。東井は、『週録』に記録を綴るといふことについて、次のように書いている。

学級担任であった頃、子どもが出してくれる日記のノートに、子どもが三枚書けばこちらは五枚の感想を書く、というようにやってきた調子で、集録¹⁹⁾の裏面を埋めていった。

そうしている中に、職員の方でも、狭い反省欄では書き足りなくなつて、はり紙をして記録を書いたり、別にノートをつくって実践の記録を書いたりしてくれるようになった。

「反省欄をもっと大きくしてほしい」というような動議も出されるようになった。しかし、私は、それには反対した。子どもの中にもそういう子どもがあるように、職員の中にも、「書く」ということには抵抗を感じる職員もあることを私は承知していたからである。そういう職員の中には、反省欄に「秋」という字がたった一字書いてあったり、「この週もまた忙しかった」とただ一行書いてあるだけ、というのもあった。私は、それはそれでいいのだと思った。ただ一字ただ一行でも書いて、まちがいをなく提出してもらえることの中に私の喜びがあった。それで、その心をいたわるような思いで、裏面の白さはぎっしり埋めていった。反省欄を大きくすることによって、書くことの抵抗感をさらに大きくし、集録を提出するそのことにまで抵抗感をもってもらうことの方がむしろ心配であった。もしも、そういうことにでもなれば、「ひとり」と「ひとり」のであいが消えてしまうかもしれないからである。²⁰⁾

千葉は、「反省記録」の欄に比較的多くのことを書いていたが、これは、決して強制されて書いていたものではないことがわかる。また、内容についても特に規定があるわけではないので、その内容は多岐にわたる。とにかく、一言でも書いて提出すればよしとしていた『週録』におけるやりとりは、東井の言葉にあるように、千葉のみならず、東井と八鹿小学校の教師「ひとり」「ひとり」との大切な場であったのである。

(3) 千葉の『週録』に見る、学びの姿

① 八鹿小学校校長東井義雄と教師9年目の千葉教諭との対話

ア) 対話について

〈対話の成立〉

上田は、「対話」について「主の自由な交替が対話の核心」²¹⁾とし、その対話の成立について次のように述べている。

私が話し手になるというためには、私は共通のことに関して言うべき内容を持った独自の主体でなければならない。そうでないと結局自分として言うことがなくなってしまい、最後には相手の言うことを聞くだけになってしまいます。そうなるともう対話になりません。逆に自分の言うことだけ言って相手の言うことが聞けない、あるいは聞かないとやはり対話になりません。自分を捨てて相手に従って聞くということが出来なければなりません。本当に自分がいうべきことを持つということと本当に相手の言うことを聞くということ。自分を捨てて相手が何を言おうとしているか、本当に聞かなければならない。それから今度は自分が言う時には相手の言うことと同じようなことを言っても自分の存在は出ません。本当に自分独自のものが出されるかどうか。このようにして対話は本当の自主性と本当の従属性との結びつきとして成立します。²²⁾

前述したように、東井は、B5版の3分の1ほどの「反省記録」の欄に、「秋」という字がたった一字書いてあることもよしとした。このことは、そこが形式的な「反省記録」を記述する場所ではなく、自由に自分の気持ちを吐露できる空間であったことを意味する。その空間は、「ひとり」「ひとり」とであいたいとねがい、東井が八鹿小学校の教師たちとのであいの場として構築してきたものである。その空間で、教師たちは、自由に思いを綴ることになる。「秋」も「この週もまた忙しかった」も、校長である東井に向き合いつつも、裸となって、つまり、心の内を何の構えもなく、東井に向けて発している言葉である。それでもよしとする東井の気持ちを、綴る側も受け止めていたのである。そして、たった一言の「秋」の言葉も、「ひとり」「ひとり」とであいたいと願った東井にとっては、自分に向けられて発せられた大切な言葉として、「その心をいたわるような思い」で、自分を捨てて相手に従って聞き、その言葉を受け止め、「裏面の白さはぎっしり埋めていった」のである。

出会う時、出会いそのものが問答となる、それをはっきり自覚的に「これ何ぞ?!」と。それに対して相手がどうこたえるか、それによって、相手は自分としてその場で初めて存在し得るわけですし、同時に、相手の問いに答えた、問いを受け容れた、問いに呼応したという自覚の中に、相手を本当に自分の存在の中に受けとめたということもあるわけです。²³⁾

八鹿小学校の教師たちが、裸になって東井と向き合うことのできる空間、それが、『週録』における「反省記録」という欄である。前述した「秋」の一言も東井に向けて発せられた問いで

ある。東井がそれにどう応えるのか東井自身が問われているのである。「八鹿小学校に勤めた八年間、職員朝会でも「おはようございます」の挨拶以外、ほとんど何もしゃべらなかった」²⁴⁾ 東井が、「心をいたわるような思い」で、職員の発する問いに向き合った。東井は、『週録』における対話を通し、どんな相手であっても相手を本当に自分の存在の中に受けとめようとしたのである。表現する側の教師たちは、自分のどのような問いであっても受け入れられたという自覚の中で、私という存在が、東井という存在の中に受けとめられたのだという実感を得ることが出来たのではないか。それは、『週録』の「反省記録」という空間での出来事でありつつも、その空間のあり様は、東井と教職員とが共に構築していった八鹿小学校という場所の姿、言い換えれば、八鹿小学校のめざす教育の具現へと繋がっていくのである。

〈繰り返し〉

千葉が『週録』に反省を書き、それに東井がコメントする。千葉が実践の省察や日々の思いを書き、それを東井が読んでコメントを綴る。そのコメントを読み今一度、自分が綴ったことについて千葉が省察する。そして、そこで学び取ったことや考えたことを日々の教育活動に反映する。それが、『週録』という場で1年間に渡って繰り返される。この年、千葉が41回綴り、東井がそれに38回応答した。

対話には繰り返して対話するその繰り返しということ自身が対話の本質に属しているということ、これは非常に大切なことだと思います。話し合ってそしてまた独りになってその話し合ったことを自分でよく反復反省する。そしてそれを本当に自己化してあらためてまた対話する。対話は積極的に繰り返す努力を要求します。この繰り返しのプロセスの中で自分も相手もまた対話の仕方も変わってゆきます。繰り返されるというこのプロセス全体が大きな意味で対話だということが出来ます。²⁵⁾

千葉と東井との『週録』を通しての対話は、学校における日常生活に組み込まれていた。そのリズムの中で、年間を通して、「本当に自分が言うべき内容を持った独自の主体」であるということと「自分を捨てて相手が何を言おうとしているのかを聞く」ということとの往還が千葉と東井との間で繰り返されていたのである。『週録』上では、まず、千葉が教師として「言うべき内容を持った独自の主体」となり、東井は「自分を捨てて相手に従って聞く」聞き手となる。次に、相手の言うことを受けとめた東井は、「本当に自分が言うべき内容を持った独自の主体」である話し手という立場になり、千葉が「自分を捨てて相手に従って聞く」聞き手となる。二人の間にある「言うべき内容」とは、授業を始めとする日々の教育活動である。それは、予め計画されていたものではない。翌週の「反省記録」に何を書くのかは計画できない。その日に起こったこと、その週に起こったこと、記述される内容すべてがその週に起こった日常の出来事である。そこが、授業研究とかカリキュラムとかいったものとは、全く質を異にするものである。内容が予め決められている訳ではなく、どのようなことが記述されるのかわからない、そうした一回性、固有性に満ちた対話が年間を通して交わされるのである。千葉にとっても東井にとっても、そこには、着飾っていない裸の私が自ずと現れてしまうことになる。そうした

対話が繰り返され積み重ねられるというプロセス全体が対話なのである。上田のいうように対話は繰り返されることが重要だとされるならば、『週録』という日常化されたものに東井は着目し、それを活用し、その空間で一人一人の教師と対話し続けていたのだということが出来る。

〈落差〉

上田は、対話の展開を“話し合う”ことであるとし、話し合うことについて、次のようにも述べている。

話し合う時、相手が他者であり、他者であるが故にのみ出てくる別の見方を持つということが前提になります。問題を共同で究明し解決していく時に、向かい合っている相手が違った立場を取る（違った考えを持つ）相手であるというそのことが、また同時に問題に含まれてくるわけです（あるいは、世界の根本事態として他者が存在するということが自身もともと問題の発端であるとさえいえるところがあります。）。²⁶⁾

違った立場を取るというとき、ここで言われるように、それは、究極的には他者であることそのものがすでに違った立場をとっているということであるのだが、教育という世界でみたとき、それは、教える—教えられるという関係、その関係を生み出している立場、あるいは、役割ということが問題となる。役割ということについて、上田は次のように述べる。

話し合う「人と人」がその都度の場所でのいわゆる役割においてだけでなく、役割を持ったままで同時に唯一人として真裸で、あるいは真裸にされる可能性において、話し合うことです。²⁷⁾

東井は校長という役割、千葉は担任という役割からは、離れられない。校長と担任という役割は、上田の言葉を借りれば、落差のあるような事態²⁸⁾である。落差のある二人が一对一で向かい合ったとき、そこでは、教える—教えられるという関係はどうなるのだろう。

落差のある二人が向かい合った時、そこで「本当に深まっていく」ということを、上田は、先生と生徒の間を例に挙げ次のように示している。

そこで教える、学ぶということが行われるわけですが、それが向かい合うということの中から—そこが向かい合うということの非常に面白いところですが—先生と生徒という落差が意味をもたなくなってくる、裸の一对一になってくるということも起こってきます。たとえば生徒からパツと質問されて先生の方が何も答えられないということがあります。その現場で先生ということが無意味になることです。先生が裸にされてしまうわけです。そしてまたそこから先生も先生として本当に真剣になるということです。そういうことが起こるのはやはり一对一ということであって、そこで本当に裸になってこれ以外にない自分になっていくわけです。²⁹⁾

お互いに役割を持ちつつも、裸にされてしまう。そこでお互いが真剣になっていく。果たして、東井と千葉が向かい合って展開し続けた対話の中で、裸の対一になってくるという事態が起こっていたのか。起こっていたとすれば、それは、どのようなことなのか。『週録』上での千葉と東井の具体的なやりとりを読む。

イ) 子どもの事実と向き合う

千葉は、第3週の『週録』に、次のような「反省記録」を綴っている。³⁰⁾

男子の中に特に働くことをいやがったり要領の良さを発揮する者が目立つ。人を馬鹿にしたような言動もよく見聞する。
「びんぼう人といわれた」「きたないといっている」そんな不平を聞く。言われた子と私との問題ではなく、全体の問題として考えさせるように指導。
学級会では、かなり混乱があり、男女各一名が泣きだしてしまった。
Aの張り切りぶりと対照的にBの無気力が気になる。遠足の日と翌24日無断欠席。家庭訪問して指導を加えた。交通事故はほんとうに申し訳ない…

4月早々、学級内でいろいろな出来事が起こっていることがわかる。千葉はこうした出来事を「反省記録」に赤裸々に綴る。それは、千葉が東井に向け、構えることのない裸の間を投げかけている姿であるともいえる。その間に対して、東井は、まず、次のように答える。³¹⁾

子どもというものは（おとなもそうですが）、決して、横着をしたがっている存在ではないと私は思っています。段をおりるのさえも　ずっとエネルギーを節約しておればいいのに、一旦とびあがってとびおりる　というおり方をします。廊下を歩くのだって、できるだけエネルギーを節約すればよさそうなものなのに、最高にエネルギーを燃やす通り方をします。
その子どもを、働くことのきらいな子にしたのは、やはりそういうわけがあると思うのです。
働きについて　何の指導もうけず
よろこびの　みつけ方も　指導されず
働いたって　つまらん
そういう後味を　長い間　積み重ねてきたのでしょう。

千葉が問題点として示した「教室の事実」に対し、東井は、その出来事そのものをどうこう言うのではなく、「そういうわけがある」と問題の本質に迫っていかうとする。その上で、東井は、千葉が発行している『ひろば』について触れる。

それが、この前『ひろば』でみせてもらいましたように、子どもの無意識の意識としてはたらいっているよろこびやねうちまで、自覚の世界にとり出してもらう……ああいういとなみによって子どもは生きるよろこび、ねうちのある生き方への指向をもちはじめののだと思います。

『ひろば』でみせてもらったこととは、以下のようなことである。

千葉は、『ひろば』2号³²⁾に子どもの次のような「社会科学習についての感想」を載せた。それに対する担任である千葉のコメントもあわせて『ひろば』に記載されている。

☆ 5年生のときのまとめは、先生がぜんぶ黒板にかいてくれてうつつだけだったのに、今はじぶんでまとめるので少しむずかしい。

学習したことがよくわかっていないとまとめることはむづかしいし、まとめることによって理解がさらに深まっていきます。力をつけるために、これからも続けるよ。

また、『ひろば』2号には、次のような詩が紹介され、千葉のコメントが添えられている。³³⁾

<p>大いちょうと私</p> <p style="text-align: right;">E</p> <p>自動車の音がうるさい 勉強なんて うるさくて する気にも なれない まどの外に 小学校の大いちょうが見える 風・雪・雨・寒さ・暑さなどに じっと耐えてきた いちょう 心のそこまで そのこんきがはいっている 自動車の音にまけている私は いちょうの木にも まけているんだ まけてなんかいられない なんだか やる気がでてきたようだ これからも 心のそこまで あのいちょうのように になりたい</p>	<p>がんばれ！ それでこそ 六年生のEちゃんだ 入学式に校長先生が話されたように あんなちいさな いちょうの実に あんな大きな 木になる力が かくされているのです。 春になっても 芽をふくのは一番おそいけど あんなに たくさんの実を 秋には 実らせる力を 今 じっと たくわえているのです。</p>
--	--

東井は、『ひろば』に紹介された子どもの感想や詩にコメントをしているのでなく、子どもの言葉にかけた千葉の言葉に着目し、コメントを送る。まとめることで理解が深まっていくということ、校長が話したいいちょうの木のお話の意味に触れること、そうした千葉の子どもへの働きかけを、「子どもの無意識の意識としてはたらいっているよろこびやねうちまで、自覚の世界にとりだしてもらおう……ああいういとなみ」とし、千葉の行っているいとなみの意味をそこに見出す。そして、「反省記録」に綴られていた学級の問題へのアプローチは、すでに、千葉の「ねうちのある生き方への指向をもちはじめ」働きかけとして行われているのではないか、そして、『ひろば』に見られるようなその地道ないとなみこそ重要であると千葉に暗に語りかけるのである。

このように、東井の『週録』のコメントには、問に対する答えを教師たちの日々のいとなみの中に見出そうとしている様子が多くみられる。見方を変えて事実をとらえ直してみるという働きかけである。時には、自分の経験や書物に書かれたことを引き合いに出してコメントすることもある。また、非常に詩的な言葉が添えられることもある。いずれも、『週録』に書かれている教師の言葉が触媒になり、東井の中にあるものが引き出されたものである。一つの事実を真ん中に置いて、教師の見方と東井の見方が交換される。そこには、校長という役割を持ったままで、同時に唯一人の教師として、さらには、一人の人間として裸であろうとする（自然とそのような姿で向かい合っている）東井の姿がある。東井のメッセージは、次のように続く

子どもが はじめから そうあるのではない ひとりに そうなりたくて なったのじゃない
そうさせたものが あった
それを見きわめ、子どもをこころならずもそうさせていたものをとりのぞいてやっていっていただく
それを おねがいしたいと思います。千葉学級だけでなく、すくなくとも六年生全体に対して。

「こころならずもそうさせていたものをとりのぞく」その仕事は、一人一人の中で輝いているものに光を当てることであり、それを東井は、千葉の『ひろば』の中から見出しているものである。そして、それを学年全体に拡げて欲しいと願う。「子どもの事実」「教室の事実」を真ん中にして、担任という役割をもった人間と校長という役割をもった人間が向かい合い対話する。その姿は、一人の教師としてお互いの教育に対するいとなみを尊重する姿勢からしか生まれ得ない。

このように、東井は、徹底して具体的ないとなみの中に、その意味や価値を見出していこうとした。千葉の『週録』には、東井からしてみれば経験の浅い教師である千葉の行っていることを意味づけたり価値づけたりする東井の言葉が何度も繰り返されている。

- 山びこのように先生のねがいが、ことばのことばを使わなくてもことばにならないことばで、ひびいていく状態にならないと授業は動き出さないものですが、だんだんそういう姿がうまれてきているようで、ありがたいです。³⁴⁾
- 子どもたちも伸びることは楽しいですね。自分が伸びはじめたという実感ももてるとおもしろいんですね。伸びるよろこび 太るよろこび を思いだしてくれたようだし、学ぶということは 何をどうすることなのか ということをお思いだしてくれたことを『ひろば』を読ませてもらいながら感じます。³⁵⁾
- たいていの方は、問題のない道を選んで進もうとするものです。ところが、千葉さんは教師として生きる道を選ぶのに但馬を選んで下さった。みんなが避けて通ろうとする特殊学級³⁶⁾の担任を取って引き受けて下さった。同和教育についても身を挺してぶつかって下さる。ほかの人が「しんど」がる仕事を取って進んで選んで下さる。「しんど」そんな態度を微塵も感じさせられない。³⁷⁾
- 下ナンパのコーラスでも、見ているまに見事な伴奏をつけてしまわれることに感心したのですが、伴奏というものは、つまらぬものでも、つまるものに変えていくふしぎな力をもっているんですね。
そして、千葉先生という人は、その伴奏をつける名手のようだ。六年生の活動を見ている、伴奏のふしぎな力がずいぶんはたらいっている。³⁸⁾

東井は、「生活綴方的教育方法」を、「子どものものの見方・感じ方・考え方・行ない方・生き方そのものをゆり動かし、客観性のあるものに拡げ、ねうちのあるものに高めていこうとする考え方」³⁹⁾と述べているが、『週録』を通して東井が千葉に行っていたことは、まさしく、東井が生活綴方を探究する中で獲得してきたものなのだといえるだろう。教師の見方・感じ方・考え方・行ない方・生き方を揺り動かすこと、それを客観性のあるものに拡げていくこと、ねうちのあるものに高めていくこと、それが、東井の『週録』へのコメントである。そして、東井は、ねうちのあるものに高めていく道筋を、自分の考え方を押し付けるのではなく、常に、相手のいとなみの中に、見出していこうとしていたのである。

そのことは翻って、千葉が主体的に綴る物語（教室・子どもの事実、実践や教師の在り方に対する省察）を読んだ東井の発見や気づきの物語として読むこともできる。千葉の問に対して、東井がどのように答えるのか、そのことそのものが問われ、東井は常に真剣になってそれに応えた。従って、『週録』に綴られた東井のコメントは、東井の学びの履歴としてとらえることもできる。前頁東井の言葉一番下の「下なんばのコーラス」のコメントは、右のように続く。⁴⁰⁾

私も そのコツを見ならって
先生方のおはたらきが生きてくるように
つまらん子どもも つまる子に なるように
学校が いい学校に なるように
底の底の底の方で 最低音の 伴奏を
かなでることが できるようにでも になりたい。

以下、千葉の「反省記録」を読み、東井が、千葉の『週録』に綴った言葉である。

② 千葉と同僚とをつなぐ東井の言葉

鼓笛の指導
先生の心とリズムが
鼓笛のこどもたちひとりひとりの中に生きて それが「一つの音」
「一つのリズム」を生み
それが
六百の子どもの耳から
六百の子どもの 心に生き
心が 脚を 動かし
心が 手を ふらせ
六百が一つになる
六百の一人一人の中で
一人の人が
タクトをふっている

(第2学期第3週)

シビシビ雨がふっても 子どもの心は 雨にぬれなかった
親たちの 坐っている 地面も 敷物も ぬれても
親たちは ぬれなかった
雨のおかげで 美しい感動に うれ得たことを思うと
その雨にさえ 感動したい 気がします
五年生の子らの 後片付けし そうじをして廻る姿が
いかにも すがすがしい さわやかさをただよわせていた
六年生の子らの
全く 縁の下の力もちみたいな片付けの態度が 実に きれいだった
そして またたくまに
シビシビ雨の下で きょうは 体育会をやりぬいた
そんなことが あったのですかというような おちついた 空気が
学校中に すぐに できあがってしまった
そして
そういう 静けさと おちつきを そのままの
「野ばらの歌」だった

(*下線筆者、原文のまま) (2学期第4週)

『培其根』は、他の教師の実践から学ぶ手掛かりとして機能したが、千葉と東井の『週録』のやりとりの中にも、他の教師が様々な形で登場する。以下は、第1学期第10週の千葉の「反省記録」である。⁴¹⁾

•9・10・11・12日 4日間 理科実験講座受講のため出張 - 今年の「同和」出張を思い出す。安心して、4日間を受講に専念できたことをありがたく思う。出かける時は、平田先生が駅まで送ってくださったし、帰ってから4日間のようすを書かせてみると、ほかの先生たちからいろいろ指導していただいた様子。わけても山田先生にxを使う式について説明していただいておかげでよくわかったと書いている子があり、早速、お礼を云う。
子どもたちも とにかく自分たちなりに授業を進めようと努力したらしいし……ほんとに、ほんとにありがとうございました。
*平田先生、山田先生は、仮名

この「反省記録」には、出張期間中に、多くの先生方がクラスを支えてくれたことが記述され、「ほんとに、ほんとにありがとうございました」と、その喜びが素直な言葉で表現されている。それに対し、東井は、まず次のようなコメントを寄せる。⁴²⁾

みんなのものが
力になろうとせずにおれない千葉さんになってくださったということなんですね。

この言葉には、校長という立場に立ちつつ、一人の人間として千葉と向き合おうとする東井の姿勢がみられる。自分を捨てて相手が何を言おうとしているか、本当に聞こうとする姿勢をもつことで（そうしようとしているというより、自ずとそういう聞き方をしているのだと思うのだが）、東井は、千葉が綴った出来事の根底に何があるのかを見ようとしている。そして、そこに見えてきたのは、周りのものたちが「力になろうとせずにおれない」千葉の仕事に向かう姿である。東井の答えは次のように続く。

山田さんの記録の中に千葉さんのしごとをたたえている文句が出ている
千葉さんの記録の中に山田さんに感謝することばがでている
平田さんの記録の中に千葉さんをたたえることばがでている
千葉さんの記録の中に平田さんに感謝することばがでている
ほんとにすなおに
すなおに すなおに
「ありがとうございました」といえる
このところに
みんなのものが
力になろうとせずにおれない ヒミツが あるんみたい。（*下線筆者、原文のまま）

千葉は、インタビューの中で何度も「八鹿小学校ではおちこぼれの私」⁴³⁾という言い方をした。当時の様子を振り返る中で、力のある先生方に囲まれて苦しんでいた様子が伝わってきた。また、東井のコメントに登場するベテランの平田先生、山田先生について、千葉は、次のように言う。

この平田先生は、私が支援の学級をもっているときに、いろんなことをやらかしたんですが、その時に、随分、批判的に言われたことがありました。「千葉さんは、いろんなことに手を広げ過ぎて、要するに、要のない扇みたいなの」というようなことを言われて、かなり、辛口のことをしょっちゅう言われましたね。⁴⁴⁾

山田先生という先生はね、私にしてみたら、この先生なにやっってはんやろなというさうい、ちょっと疑問をもつようなところがあっても、東井先生に山田さんがこういうこと言ってる、こういうことしている、ああ、そうやったんかっていう。⁴⁵⁾

迷いつつ進む千葉に対し、千葉よりもベテランである平田も山田も遠慮なく厳しいことも言ったようである。しかし、東井は、「山田さんのことばの中に千葉さんのしごとをたたえている文句がある」「平田さんのことばの中に千葉さんのしごとをたたえることばがある」と千葉にコメントを送り、他者と素直に向き合うことのできる千葉の姿勢が、他の人たちを動かしているのだということを東井自身の気付きとして伝えている。『週録』に具体的に綴られた出来事を手掛かりにして、千葉も東井も、八鹿小学校の教育にとって、そして、子どもたちにとって、本当に大切なものは何かということ、異なるアプローチの仕方、共に探究し続けている。

大切なものの探究は、自ずと他の教師たちの登場へとつながる。多くの人たちとのつながりの中でこそ学校が成り立っているのだから、大切なものの探究の道筋では、他者の登場は、当然のことであるといえるだろう。『週録』の中で同僚のことや学年のことが話題となったのは、年間 38 回のやり取りの中で、14 回見られる。

そして、こうした教師たちの関係性の中でこそ、子どもたちが育っていくのだと、東井のコメントは続く。

そして こういう中から ほんきで ほんとにほんきで
汗ブルブルになってはたらいてくれる子どもが生まれる
気のよわい おとなしい K のような存在も
尊重される ふんいきが生まれてくる
K のような子も 光を放つ学級が生まれてくる。

「こういう中から」というのは、「ほんとにすなおにすなおにすなおに『ありがとうございました』といえる」、そして、そういうものに対して「力になろうとせずにおれない」そうした教師同士の雰囲気の中からのことである。これらは、授業技術でもなければ、職員間で決められたルールでもない。しかし、こうした中からこそ、「ほんとにほんきではたらいてくれる子」「一人一人が光を放つ学級」が生まれるのだと東井は千葉に語りかける。「あなたのしていることには、こうした意味があるのだ」という東井自身の気付き、発見を伝える働きかけである。そして、この東井の言葉に、東井がめざした学校づくりの理念をみることができる。

3 教師たちの学び合い ～5月14日・15日のこと～

「授業の方 どうだ？」 「あかん、物言ってくれへん」 一か月たった。

学年会でも問題にしてみた。

「子どもに発言させる授業からは、もう解放してもいいんとちがうか」

「やっぱり 子どもが 云ってくれんと 授業 オモロナイで。『君ら アーとかスーとか云えいや』というとるんやけどな」

「ひとりひとりの考え方を組織していくのが 授業の役割だと思うんだけど、そのためには やっぱり ものいってくれんとこまるんだけどな」 また半月たった。

(1) 『週録』の「反省記録」(第1学期第6週)と『ひろば』5号⁴⁶⁾

千葉が6年生を担当して1か月半が経っている。上記、第1学期6週(自5月11日至5月16日)の『週録』には、授業づくりに対する苦悩が綴られている。八鹿小学校は、「4月からね。結局、日本全国から参観者が見えるんですよ。断りなくいきなり戸がガラッと開いて誰が入ってくるか分からない」⁴⁷⁾と千葉が言うように、参観者がひっきりなしに訪れる学校で、いつでも自由に授業の参観が可能であった。そんな中、ある出来事が起こる。以下、『週録』の続きである。

14日・15日のできごとが今のところ発火点になって、これまでになかった芽が出かけている。しかられたショック(ショック療法というのものもあるけど)で、シャンとした姿勢を定着させる仕事がある。定着というのは押しつけて型にはめるということではないだろう。

どっちにしても私一人では たらないようだ。今日も平田先生が「ひろば5号」の裏にぎっしりと「千葉さんおめでとう」と書いてくださった。うれしかった。きびしいことをいう人ほど、ほんとうの仲間なのだという実感にひしひしとつつまれた。

14、15日の出来事は、以下に示す千葉が発行している学級通信『ひろば』5号に詳しく書かれている。

* B4 縦版縦書き(タイトルと最初の言葉は横書き)、学級通信の体裁で書かれているが、ここでは、書かれている内容を横書きで羅列した。

『ひろば』第5号5月15日

この学級にとって5月14日15日は大切な日だ。みんなが6年生の学習にめざめた日だから 大かみなりがおちた

五月十四日 三校時 国語の学習の時、松井先生、田中先生、井原先生が授業を見に来られた。ポツンと発言、さいそくされてダラダラとつけくわえ。ボンヤリしている人、あくびをしている人……

何を聞いているかわからない発問をする教師 ポソポソ、モゴモゴと発表。

長いー 長いー一時間だった。あと十分のこしたまま授業を終わり、第三段落のひとりしらべにうつった。

「今日の 君らの学習ぶりを見て、正直なところ がっかりした。それでも六年生の学習か！」井原先生の声がとんだ。中学年のころの話が出て

「どうだ ひとつ がんばるか！」

「……」

「やる気が あるんか！」

「……」

それから約三十分 井原先生の話は続いた。

担任は担任で 田中先生 松井先生から この学級の問題点をいろいろ話してもらったり、これからのことについて話し合っていた。

—中略—

S

初め井原先生が 私たちの学習を見にこられた時 なつかしいなあと思いました。もう一度井原先生といっしょに勉強したいなあとも思いました。そしてこの時間はいつもより よく発表したから井原先生は感心しておられるだろうと思いました。ところが井原先生が きゅうにおこったように話をされた。今のままの学習だったら 全然だめだ。三年か四年生ぐらいだろうといわれました。私はびっくりしました。あれだけ発表したのにまだだめだといわれるなんて思ってもいませんでした。私の考えがあまかったのだろうと思いました。井原先生の長い話がありました。そのことばのひとつひとつが なぜか胸にじんときます。(中略)

井原先生の目は光っていました。こわいほどひかっていました。そして私には井原先生が私たちに何をいおうとしているのか少しずつわかってきました。教室の中は井原先生の声が聞こえるだけでしーんとしています。いっしょうけんめい聞いているのは私だけじゃないということがわかりました。みんな井原先生の方をじっと見ていました。下をむいて泣きそうになっている人もありました。(後略)

—中略—

またまた千葉かみなり！

そして今日、体育が終わって二校時は算数。教室に行ってみたら「ひろば」を出していないのが五人、うしろでうろうろ。算数だというのに机の上にも何もださずにぺちゃくちゃしゃべっているのが二人、用意はしても本もノートもとじたままが四人、おまけに、ひらいていても、ひらいているというだけで ぼんやりしていたのが残り全員……

さんざんしかりつけているうちに腹が立つやら あほらしいやら

「やめた！」

一言いって指導機に向って腰をおろしてしまった。しずまりかえった教室に小さな波がひろがり始め いつのまにか机をよせ合って真剣なグループ学習が始められていた。

(よーし これなら よし)

三時間目の国語。目の色がちがった。姿勢がちがった。先生もきびしかった。

ねうちのある発表が指名されなくても どんどん続いた。これまで殆ど発表をしたことのない人もすすんで考えをいった。時にはまちがいがあつた。でも まちがうことによってお互いが深まり合っていた。

「今日の国語どうだった？」「たのしかった！」「よかった！」「人の考えがよくわかった」「あくびが出なかった」口々にみんなはさげんだ。この調子だ！さあ進行！

* 原版ではSは実名。Sの文中の(中略)(後略)は、実際にそう記述されている(担任が記述)

5月15日付の『ひろば』には、担任が綴った5月14日の3校時の授業の様子とこの時の様子についての二人の児童の感想、そして、担任が綴った翌15日の様子が書かれている。教室での出来事が赤裸々に書かれ、通信として発行されている。

『ひろば』を読んだ平田は、その裏にメッセージを綴り、千葉に渡した。千葉の『週録』(原簿)の第1学期第6週には、この時に渡された平田のメッセージが書かれた『ひろば』5号が丁寧に畳まれて貼り付けられていた。千葉の6年生の『週録』に、貼り付けられているものは

他には見当たらない。千葉にとってはとても大切なもの、そして、東井にも是非、読んでもらいたいと思ったものなのであることがわかる。

(2) 『週録』に貼りつけられた『ひろば』の裏に綴られた平田教諭からのメッセージ

千葉さん、おめでとう

僕はいつでも自分勝手な判断で、とやかく言うことが多いので、千葉さんの諸々の営みには何一つ益することを言ったことはありません。だから、今年度の、千葉さんの営みにも、積極的に言おうとするのをさしひかえていました。

ですけど、いつか、体育の学習をしている男の子を見て、僕も男の子のうしろに並んでいっしょに勉強していこう。時によったら、どなってやろうと思いがらしばらく見ていたことがありました。そしてまた、或る日の、千葉学級の男子が体育を終ったあとの男子の不平、不満を水道の前で聞きながら、「これだけの不平、不満は何かあるのではないかな」とも思っていました。

今の六年生を担当したことのある田中さんが、六年生の千葉学級の男の子のことを気にしているような話しぶりを聞きました。松井さんと、何か相談されているのを聞きました。僕はそういう配慮をする同僚の二人を心から嬉しく思いました。きっと、何かいい芽が出てくるぞ!と信じていました。

井原さんも加わっての、千葉さんにとっては文字通り「長ーい、長ーい苦しい時間」だったでしょうが、それをのりこして、こういうさわやかな新緑の五月晴れが来たのですね。僕はそれを、おめでとうと言わずにおれなくなってこんなことを書いたのです。

きびしい事を書くけど、十四日、十五日の経験が、そのまま子どものみごとな転身とならない状況も続く事があると思いますが、それはそれで、また、ファイトをもやす挑戦となるのです。

千葉学級の姿という内容を巡って、様々な場所で対話生まれる。松井と田中。松井は千葉と仲の良い女性教師であり、田中はかつてこの学年を担当したことのある教師である。井原と田中。井原も4年生でこの学年を担当している。千葉と松井、あるいは、千葉と田中。そして、千葉と平田。ここで共通していることは、どの場所に於いても、お互いが、共通のことに關して、「言うべき内容を持った独自の主体」であるということである。ここまでの場面で、東井は登場しない。すべて、各々の教師たちが自ら生み出した対話の場所である。そして、こういった場所がこの時に限って唐突に生み出されたのかといえば、そうではない。千葉は次のように言う。

いつ戸がガラッと開いて誰が入ってくるか分からへん状態。だから、所謂その開放されたとか閉め切ってはられない教室ですよ。そうすると、通りかかりに同僚が私が発問していたことを聞いて、で、後で職員室に帰ってから、“さっき、千葉先生ああいう発問してたけど、あれやったら子ども答えられへんよ”ってというようなことをポロっと言ってくれるんですよ。“ほな、どないしたらええの?”って聞いたら、“わたしはこういうようなことやとる”とかね。そういう職員室の交流があるんです。⁴⁸⁾

教師たちが主体的に話し合う対話の場所が、八鹿小学校では、様々なところに構築されてい

た。そうした中で5月14日15日の出来事である。その出来事を赤裸々に千葉が『ひろば』に綴る。それによって、それを平田が知ることになり、そこに、千葉と平田との対話が生まれる。「自分勝手な判断でとやかく言うことが多い」と自制する平田が、「言わずにおれないのです」という。

『ひろば』に綴られた「本当に自分がいうべきことを持った」千葉の言葉を、「自分を捨てて相手が何を言おうとしているか、本当に聞いた」平田。そして、「僕はいつでも自分勝手な判断で、とやかく言うことが多いので、千葉さんの諸々の営みには何一つ益することを言ったことはありません」という平田が、「自分独自」の言葉で、『ひろば』の裏に書き綴った文字で千葉に語りかける。言葉で直接伝えるのではなく、文字にした平田。いつも手厳しいことを言ってきた平田が、「千葉さん おめでとよう」という誉め言葉を千葉に伝えるのに、文字を選んだことはその意図を推察できなくもない。

そして、その中で「僕はそういう配慮をする同僚の二人を心から嬉しく思いました」と平田も東井と同じように、千葉のことを気遣う仲間たちの存在を告げる。仲間の存在の有難さを綴る平田の言葉が、『培其根』第36号にある。上記の千葉へのメッセージを綴った前月の4月に書かれたものである⁴⁹⁾。

主任という名の重さを感じた時、田中さんや松井さんの力強い応援やはげますが、ほんとに嬉しいものであることを痛感した。小さな事であったが、主任面をして「なあ、松井さん、あの事はなあ…」と述べると「その事はすでに田中さんと話していたのです。田中さんが、松井さん、私らでできる事はやっていこうと言ってくださっているのです」という事だった。

そして、この出来事を「千葉さんにとっては文字通り『長ーい、長ーい苦しい時間』だったでしょうが、それをのりこして、こういうさわやかな新緑の五月晴れが来たのですね」というメッセージを千葉に送る。そして、千葉は、『週録』に、「うれしかった。きびしいことをいう人ほど、ほんとうの仲間なのだという実感にひしひしとつつまれた」と綴るのである。

この様子を、東井は、千葉の『週録』、『ひろば』、『ひろば』の裏面に書かれた平田からのメッセージを読むことによって知る。これらの出来事を東井は、どう受け止めたのか。

(3) 東井と教師たち

① 東井のコメント

以下、『週録』に綴られた東井の言葉である。

「ひろば」をもらって 新しいものが 生まれよるぞ と喜んだだけで おしまいにしていた自分を、ここに大切にはりつけられた「ひろば」の裏を見て、「まいった」と思いました。
松井さんもいい すばらしくいい
田中さんもいい すばらしくいい
二人がひびきあっている それがまたいい 井原さんもいい
そのかんしゃくがいい (このかんしゃくは 井原さんでなければおこしてはいけなし 井原さんでなければ おこせないし 井原さんの かんしゃくでなければ ききめがない――
そのかんしゃくがいい)
そして 「ひろば」の「裏」のような そういう「存在」がまたいい

平田さんのことばのとおり、この日をさかいに スカッと - - - というようになぐあいに 歴史 というものは かわるものではない。したがって、苦労はこれからだ と 考えてもらう方がほんとうでしょう。

しかし、

可能性がチラッと顔をみせたということで、やっぱり この日は記憶すべき日であるんだと思います。がんばりましょう。

このコメントの中には、東井の「いい」という言葉が6回（3人の各々の教師について、松井と田中の「ひびきあい」について、井原の「かんしゃく」について、そして、『ひろば』の裏のような存在について）登場する。他のクラスに入り込み、子どもたちに直接ものを言う。一歩間違えれば、担任の顔をつぶしてしまったり、教師同士の関係性を壊してしまったりしかねない行為である。それに対して、千葉は「うれしかった」と言い、東井は「いい」という思いを抱く。

「かんしゃく」という一般的にはよしとはされない行為についても「いい」とするが、それにはあくまで「井原さんでなければおこしてはいけない」という限定をつける。井原と子どもたち、井原と千葉、井原と松井、井原と田中という関係性の中における「かんしゃく」であるのだからこそ、「いい」のである。関係性は、一人一人の教師と繰り返された様々な対話によって構築されてきたものであり、東井もその関係性を了解した上で、「そのかんしゃくがいい」と言う。一般論であれば、また、東井が教師一人一人を理解することができていなければ、この「かんしゃく」は、手立てとしてあまり望まれないものであるだろう。しかし、そこに関わる皆が、その「かんしゃく」を八鹿小学校の子どもたちを皆で育てていこうという文脈の中で理解する。理解できるだけの協働性を持ち合わせている。だからこそ、「かんしゃく」の意味が千葉に伝わり、平田にも、そして、東井にも伝わるのである。

東井が「いい」と綴った『ひろば』の裏のような「存在」とは、前掲した平田が千葉に寄せた言葉であるが、東井がここで「存在」という言葉をわざわざ鍵括弧をつけて使ったのは、文字という後に残る形で伝えられたものであることを意味する。平田は、消えてしまう音声としての言語ではなく、形として「存在」することになる文字としての言語を使う。「千葉さんの諸々の営みには何一つ益することを言ったことはありません」という平田は、文字に残されるという責任ある形で、千葉が表面に綴った出来事に対する思いを伝える。東井は、そのような形をとった平田を「いい」と言っているのである。平田と千葉の関係をとらえているからこそ、伝えることのできる東井の言葉である。平田が文字という形で思いを伝えることで、それを千葉がどのように受けとめることができるのか、東井は、それを理解することが出来ていたのである。

千葉が八鹿小学校を離れて46年。インタビューの中でも、千葉は、怖い先生であったという平田について、2つのエピソードを語った。

私が支援の学級をもっているときに、その学級の子が卒業するそのときに、視聴覚担当やったから、放送室にいて、レコードをかけてたんですよ。6年生を校庭で送る。その

ときに平田さんが入ってきて、「千葉さんの受け持ったあの子が出ていくのに通るんやから、行ってやれ。僕わかる」って言ってくださった。で、その時に、平田先生ってこわいって思ったけれど、ちゃんとそこまで見てくださっているんだなって。－中略－

阪神淡路大震災の後にね、平田さんからお米やら野菜やらどさっと、ダンボールに送ってくださった。この野菜も僕が作ったって、震災の後、大変やと思うけど、これ食べて元気出してって。⁵⁰⁾

「きびしいことをいう人ほど、ほんとうの仲間なのだという実感にひしひしとつまれた」、そう綴った千葉の思いを理解することのできる言葉である。

② 一人一人の教師を見取り、教師同士をつなげる

井原にしろ、平田にしろ、そして、松井や田中についても、東井は、彼らの考え方やお互いの関係性をよく理解していた。そうでなければ、この出来事について校長がこうしたコメントを送ることはできない。一般的に校長という役職は、職員との接点は多くはなく、職員たちの心のひだまで入り込んでその心持や考え方をとらえることは難しい。しかし、千葉は、インタビューの中で次のように言っている。

何年生のときやったかな。おんなじ学年やって、なんかちょっと肌合いが違うという先生もあったんだけど、そのことを東井先生がこの人はこんなことを言ってるよっていうてね。それを教えて下さることも。“ああ、そうやったんか”と。だから、どっか書いていましたよね。その東井先生っていうのは、その他の先生の良いところを見つけて、それを広げて下さる。⁵¹⁾

だから、あの、東井先生やめられてから、誰かが言ったセリフですけどね。結局、私らは、東井先生の掌の上に乗ってたんやねって。お釈迦さまの手じゃないけど、孫悟空じゃないですけどね。そういうふうに、ほそっと言った人がいました。⁵²⁾

東井には、教師たちの姿が見えていたのである。それは、何故か。これまで見てきたように、東井は、『週録』を通して、教師一人一人と対話を積み重ねてきたからである。『週録』という空間で、一人一人の教師との出会いを繰り返してきたことが、教師一人一人の理解につながっているのである。

『週録』におけるやり取りを通して、一人一人の教師とつながる。そして、『週録』のコメントを通して、相手の教師と他の教師とをつなげる。さらに、『培其根』を発刊することで、『週録』におけるやり取りが閉じたものにならず、職員に開かれたものとなり、職員は、『培其根』を読むことで、東井と一人一人の教師とのつながりを知る。そして、そこに綴られている様々な出来事や考え方から周りの教師たちの日々のいとなみを知ることになる。さらに、東井のコメントから、具体的な出来事を通して、東井の考え方についての理解を深めていく。東井は、そうしたシステムを八鹿小学校に構築していたのだ。

千葉) 東井先生は確かにね、職朝でもあんまりおっしゃらないし、それから、いろんな所の挨拶でもね。だらだら喋ることはほんとになかったですね。

原田) でも、その彼のスピリッツは伝わっているわけですよ。

千葉) それは結局、この週録を通じてとか

原田) そうなんですね。

千葉) 『培其根』を通じて。だから、あの、なんにもおっしゃってないけど、こういうこと書いていただいてるっていう。だから、おかしな言い方ですけど、何か知らん間にほんとに手のひらに乗ってたっていう感じですか。

原田) そういう雰囲気があったんですね。

千葉) 気が付いてみたらほんとに…。

東井先生が退職されたあと、雰囲気がガラッと変わったのを覚えています。確かに校長先生というのは、オーケストラの指揮者なんですよ。だから、同じ楽団でも指揮者が変わると音も違ってくるんですよ。⁵³⁾

重要なのは、これらの対話の真ん中には、常に、子どもの事実、あるいは、教室の事実という具体があることである（時には、そのプライベートな問題も綴られているが）。そして、その事実に対する考えを、自由に綴る。東井は、どんなことでも、必ずしっかりと受け止める校長であった。まず、受け止め、それによって自分の心が揺さぶられ、そして、そこから生まれた東井自身の言葉でコメントを綴る。東井は、職員との関係について、次のようにもいっている。

職員の中には、必ずしも世間の評価を十分受けている者ばかりではない。東井の生き方にはずいぶん外れたものもある。しかし、そういう職員こそ、私の限界を破ってくれるのではないかと期待して信じよう。竹藪の竹が地の底でつながっているように、私流でない職員も私の欠点をおぎなってくれるために、やっぱりつながって生きてくれるのにちがいない。⁵⁴⁾

「私流でない職員も私の欠点をおぎなってくれるために、やっぱりつながって生きてくれるのにちがいない」という向き合い方で『週録』の言葉を読む東井は、上田のいう「自分を捨てて相手が何を言おうとしているか、本当に聞かなければならない」という聞き方で、相手の言葉を受け止めコメントを書き続けたのである。相手が東井に伝えようとしていることが東井にとっては異なっている意見であったとしても、あるいは、『週録』の反省欄に綴る言葉が少なかったとしても、東井は、それをその教師からのメッセージであると、とらえることができた。こうしたことができるのも、対話の真ん中に子どもの事実、教室の事実を置き、常に、お互いを一人の教育者として尊重し合う姿勢があるからである。それが、「竹藪の竹が地の底でつながっている」ということである。そうした地道ないとなみが、そして、そうしたいとなみを発信するという東井の仕事が、職員同士をつなげ、職員同士の考え方をつなげ、よりよい教育を目指して対話を重ね続けることのできる職員の姿を八鹿小学校に具現してきたのである。

4 おわりに

(1) 現在のビジネスの世界

近年、企業経営においてピープルマネジメントの重要性がいわれ、その手法の一つとして、1on1（ワンオンワン）ミーティングが注目されている。1on1 ミーティングは、マネージャーである上司が部下であるメンバー一人一人と1対1で「頻繁に面談を行って、リアルタイムで振り返りと軌道修正を行いながら、パフォーマンスを向上していこうとするために導入」⁵⁵⁾されたもので、大手企業のヤフーなども週1回を原則として、30分程の面談が繰り返し行われ、成果を上げている⁵⁶⁾。1on1の実践にあたっては、1on1がメンバー本人にとって、気づき、学び、成長実感などを豊富に得られる場としてデザインされることが重要であること⁵⁷⁾、同時にマネージャー自身にとっての経験学習の場でもあること⁵⁸⁾、マネージャーはメンバー間のコラボレーションによって、チームパフォーマンスを高めることにも努めなければならない⁵⁹⁾等が示されている。

一方、中原は、『ダイアログ 対話する組織』⁶⁰⁾で、高度経済成長の牽引役であった世代が次々と現場を離れていく今、企業にとって本当に流通させなければならない知識は、長い時間をかけて人から人へと受け継がれてきた「現場の知恵」であるとし、それを組織内で共有するために、「対話」の重要性を示す。対話を通して、「私」の経験やエピソードを語り合い、そこから洞察を得ることのできる機会を設定することで、企業にとって高い価値をもつ暗黙知や実践知である現場の知恵を組織内で共有することができるのだという。企業も、専門性の高い知識やスキルは、暗黙知や実践知といわれる知恵と結びついてこそ生かされるのだということを認識しているのである。そして、そうした知を生かしていくためには、現場の知恵を共有し学び取っていくことのできる人間のつながり（ヒューマン・ネットワーク）を築いていくことが重要である⁶¹⁾とする。そのような対話を重視した新しい取り組みとして、「『対話』による問題解決が根づくトヨタのOJD（On the job Development）」⁶²⁾、「語り合うことを重視する『デンソー・スピリット』」⁶³⁾、「実践と対話を結び付ける花王のワークショップ」⁶⁴⁾等が紹介されている。

このように見ていくと、『週録』を通して東井が行ってきたことと、企業等が現場の知恵の重要性を認識し、それを共有するために行っている対話を生かした新しい取組のあり様とが、多くの点で類似していることに驚かされる。そこに通底しているものは何なのか。

(2) 東井が求めた教師たちの姿

東井は、研修部長の、「『自主共同学習』とか『主体的学習』とか『バズ学習』だとかという授業の形を、みんなで追求してみたい」といった建言に対して、「そういうことよりも、どの先生もが、何とかこの子も、この子も、もっとこんなふうにしてやりたいと、自分のねがいをもとの、自分のしごとをもっと高めようとしてもらえることのほうがほんとうではないか」と反対する。そして、その理由は、「授業というものは、ひとりひとりが、自分で生みだしていくものだ」と考えるからだとする。⁶⁵⁾

東井が求めたものは、教師一人一人が自分のねがいをもって授業を生み出していきいとなみそのものなのである。全国から多くの訪問者が訪れた八鹿小学校に、定型化された授業方法があったわけではない。それは、授業に限ったことではなく、体育会や子どもの生活等、日常の

様々な教育活動に至るまで、教師たちは、その都度立ち止まりながら、目の前にいる子どもの事実、教室の事実と向き合いながら、考えを交流し合い、高めていこうとした。それは、東井が記述した次のような姿として現れている。

たとえば、一人ではやれなくても二人でやれば、ひとりひとりがどんなに力を入れてもできないことができる。二人でできないことでも三人が力を合わせると、A プラス B プラス C の総和の何倍も大きい仕事ができ、問題の壁がつき破れる、という私の考え方などでも、いつの間にか職員みんなの思想となって「共同経営で行こう」などというスローガンを、自分たちのものにして打ちだしているのである。しかも、それを単なるスローガンに終わらせず、ある学年では算数指導の中で、單元ごとに予備調査をやり、子どものつまずきを点検しては、「こういう類型のつまずきをもった子どもはほくが指導しよう」「それでは、こういう類型のつまずきはわたしに指導させてください」といった調子で、学級を超えて、子どものもっている問題点に即応した指導を生み出し、「移動分団学習」と名づけている。教科担任制をくみ入れて、ひとりの職員の長所を、全学年の子どものものとして生かそうとしているのである。「授業」という立場からすると、子どもの類型が揃っていた方がいいが、学び合う側からいうと、質も類型も色とりどりの方がいい磨きあいができる、というような考えに立って、同学年の三人でいっしょうけんめい授業をみせあい、批判しあい、学びあい、それを「共同経営」と称して頑張っている学年もある。⁶⁶⁾

こうした姿を生み出したものになっているものが、『週録』における対話なのである。それは、「本当に自分がいべきことを持つということと本当に相手の言うことを聞くということ」の徹底の積み重ねによる対話である。このようにして行われた『週録』における対話は、『培其根』によって職員に伝えられる。それによって、そこに綴られた東井のねがい、あるいは、それぞれの教師たちの実践、省察が共有される。それに刺激を受けて、それぞれの教師がまた新しい試みに挑戦する。それをまた『週録』に綴る。そうしたプロセスを経て、八鹿小学校の教育は構築されていった。森信三が、東井を我が国教育界の「国宝」といった上で、その確証たるものは『培其根』であると述べた⁶⁷⁾のも、『培其根』が教育の方法の書ではなく、東井と他の教師たち、教師たち同士、そして、教師と子どもたちとの対話の記録であり、そうしたいとなみそのものが八鹿小学校の教育を生み出していたことにこそ森が価値を見出していたからなのではないか。「現場の教育学の創出」とは、創出されたアウトプットを求めるのではなく、教師たちが現場の教育学を創出しようとするそのいとなみにこそ意味を見出していくことなのである。

どんなに技術が進化しようとも、求められるものが多様化しようとも、組織を構成する「ひとりひとり」のねがいとそのねがいを具現しようとする行動が、組織を動かしていく力となっていく。それは、教育の世界も企業等の世界も、実は、時代を超えて変わらない不易といわれるものであるのではないか。そして、その願いを引き出し、具現のための道筋を支えていくのが、他者との継続的な対話である。lonl などの活用が盛んになってきているのも、そういうこ

とに対する再認識の動きであるとみることができるのではないか。

東井が求めたものも、教師たちが自らの力で現場の教育学を創出しようとするいとなみ、そうしたことに協働で取り組む教師の姿なのだといえることができる。そして、それは、「自分の仕事を責任をもって追求するという私の学校の職員の生き方は、そのまま、私の学校の子どものたちの生き方もなっている」⁶⁸⁾ というように、八鹿小学校の子どもを育てていくための重要な手立てとなっているのである。

注

- 1) 千葉孝子教諭については、本人の許諾を得て、実名で表記した。八鹿小学校の他の教師については、仮名の表記である。従って、東井や千葉が書いた文、子どもの作文等に当該教師の名前が記述されるような場合でも、本論では、実際とは異なり、仮名に変えて表記している。
- 2) 石井英真「授業研究を問い直す——教授学的関心の再評価——」、『授業研究と校内研修 教師の成長と学校づくりのために』教育方法 43 日本教育方法学会編，図書文化社，2014，p37
- 3) 上掲書，p45
- 4) 上掲書，pp42-43
- 5) 上掲書，p43
- 6) 東井義雄（1912-1991）は、1964年（昭和39年）4月に兵庫県豊岡市八鹿町立八鹿小学校校長に着任し、1972年（昭和47年）3月退職までの8年間、校長を務めた。
- 7) 上田閑照，「対話——共に独りと」、『生きるということ——経験と自覚』，人文書院，1991
- 8) 千葉孝子教諭は、1966年（昭和41年）八鹿小学校に赴任。東井校長の下で6年間を過ごした。（3年担任、特別支援学級担任3年間、6年担任、5年担任）
- 9) 『週録』とは、担任が、毎週の授業内容（教科等名と単元名等の簡単な内容）を記述したもの。それに教務主任、教頭、校長が目を通す（それぞれの押印欄がある）。八鹿小学校の週録には、『本週努力目標』『授業内容』『時間計算』（各教科等の合計、累計を記載）『反省記録』の欄がある。『培其根』は、この週録に綴られた担任の『反省記録』とそれに対する東井のコメントを便りとしてまとめたもの。
- 10) 東井義雄『培其根』昭和四十一年度（復刻版） 不尽叢書刊行会，1966
- 11) 千葉孝子へのインタビューは、2018年9月10日、2019年12月7日の2回、神戸にて実施。
- 12) 畑井克彦「校長としての東井義雄：若手教師の育て方、千葉孝子の実践を通じて」，芦屋大学論叢，2014
- 13) 2018年9月10日「千葉孝子へのインタビュー」（於：芦屋）で、千葉は、『昭和45年度 週録 八鹿小学校 第6学年2組 千葉孝子』について、「たまたまこれが出てきていてね、芦屋に持って帰って。この前、たまたま関宮に帰った時に、段ボールごと家に持って帰ってきて整理したら出てきてね」と言っている。
- 14) 当時は『特殊学級』といわれていたが、ここでは、現在使われている『特別支援学級』と表記する。以後も同様。引用文については、原文のまま表記する。
- 15) 上掲書，pp10-11
- 16) 『昭和45年度 週録 八鹿小学校 第6学年2組 千葉孝子』，第1学期第1週，千葉の「反省記録」に対する東井のコメント（『週録』裏面），自4月6日至4月11日。
- 17) 『ひろば』は、千葉が昭和45年度6年2組で発行した学級通信。第18号まで。加えて「号外」が7号ある。
- 18) 『ひろば』では実名で書かれている。

- 19) ここで、東井は、週録を「集録」と記述している。職員たちが使っていたものの表紙には、「週録」とはっきりと記載されているので、東井の単なる“勘違い”によるものと思われる。
- 20) 東井義雄『東井義雄著作集 別巻1 培其根 上』序
- 21) 前掲, 上田閑照, 「対話——共に独りと」, 『生きるということ —— 経験と自覚』, p81
- 22) 上掲書, pp81-82
- 23) 上掲書, P78
- 24) 前掲 東井義雄『東井義雄著作集 別巻1 培其根 上』序
- 25) 前掲, 上田閑照, 「対話——共に独りと」, pp92-93
- 26) 前掲, 上田閑照, 「対話——共に独りと」, p80
- 27) 上掲書, P84
- 28) 前掲, 上田閑照, 「対話——共に独りと」, 『生きるということ —— 経験と自覚』, P87
- 29) 上掲書, P87
- 30) 上掲, 第1学期第3週、A、Bには、具体的な児童名が記されているが、ここでは、A、Bとした。
- 31) 上掲, 第1学期第3週、裏面の東井の言葉。実際には、もっと改行されて書かれており、その改行にも意味があるのだと思うが、紙面の都合上、続けて書いた。
- 32) 千葉孝子『ひろば』2号（発行年月日は記載されていないが、前後の関係から1960年4月20日頃だと思われる）
- 33) Eには、具体的な名前が記されているが、ここでは、Eとした。
- 34) 上掲, 第1学期第7週。
- 35) 上掲, 第1学期第8週。
- 36) 原文のまま『特殊学級』と記述した。
- 37) 前掲『昭和45年度 週録 八鹿小学校 第6学年2組 千葉孝子』, 第2学期第1週。
- 38) 上掲, 第2学期第9週。
- 39) 東井義雄, 「生活綴り方をめぐって」『東井義雄著作集 3』, 明治図書, 1972, pp78-79
- 40) 前掲『昭和45年度 週録 八鹿小学校 第6学年2組 千葉孝子』, 第2学期第9週。
- 41) 上掲, 第1学期第9週。
- 42) 前掲『昭和45年度 週録 八鹿小学校 第6学年2組 千葉孝子』, 第2学期第1週。
上掲, 第2学期第9週。
- 43) 千葉孝子へのインタビュー（2018年9月10日）では、八鹿小学校時代について、「わたしは、何べんも言いますけどね。ほんと八鹿小学校で落ちこぼれもいいとこなんですよ。もう、だからここでも愚痴ばかり書いてますよね。“これがあかんかった、あれがあかんかった”って」という言い方をしている。
- 44) 千葉孝子へのインタビュー（2018年12月7日）より
- 45) 千葉孝子へのインタビュー（2018年12月7日）より
- 46) 千葉孝子『ひろば』5号, 1960年5月15日
- 47) 千葉孝子へのインタビュー（2018年9月10日）より
- 48) 千葉孝子へのインタビュー（2018年9月10日）より
- 49) 東井義雄『培其根』第36号（昭和45.4）「花がいっぱい 蕾もいっぱい」,（『培其根』第5巻, 不尽叢書刊行会, 1970, p15
- 50) 千葉孝子へのインタビュー（2018年12月7日）より
- 51) 千葉孝子へのインタビュー（2018年9月10日）より
- 52) 千葉孝子へのインタビュー（2018年12月7日）より
- 53) 千葉孝子へのインタビュー（2018年9月10日）より
- 54) 東井義雄, 「一八 燼（もえさし）の私ではあるけれども……」『東井義雄著作集7 学級経営と学級作

- り』, 明治図書, 1973, p154 *初出は、『校長の教育論』(共著), 明治図書, 1971
- 55) 松丘啓司『1on1 マネジメント』, ファーストプレス, 2018, p22
- 56) 本間浩輔『ヤフーの 1on1 部下を成長させるコミュニケーションの技法』, ダイアモンド社, 2017
- 57) 上掲書, p23
- 58) 上掲書, p34
- 59) 上掲書, p153
- 60) 中原淳・長岡健『ダイアログ 対話する組織』, ダイアモンド社, 2009
- 61) 上掲書, p141
- 62) 上掲書, p134
- 63) 上掲書, p166
- 64) 上掲書, p170
- 65) 前掲書, 東井義雄, 「二〇 教職員をうまい授業者に育てるには」『東井義雄著作集7 学級経営と学級作り』, p172 *初出は、『学校運営研究』一〇二号, 明治図書, 1970
- 66) 前掲書, 東井義雄, 「一八 燼(もえさし)の私ではあるけれども……」 p156
- 67) 東井義雄『培其根』第壹卷, 昭和四十一年度(復刻版), 実践人の家, 1978, 序 森信三
- 68) 前掲書, 東井義雄, 「一八 燼(もえさし)の私ではあるけれども……」 p156